(2)　・□□□□　□　□□
　　・□□　　□　　(152)×(12)×4　081

(3)　□□□□□□　　(84)×(12)×4　081

(1)は、上・下端、左・右側面が欠損している。表面に三文字分の墨書が認められるが、判読不能である。(2)は、二片が接合する。上端及び左側面が欠損しており、下端には焦げた痕跡が残る。表裏に墨書が認められるものの判読できない。(3)は、上・下端が欠損。(2)(3)は、接続しないが、板材の状態や特徴から同一木簡の断片であった可能性が高い。

（三好美穂）

奈良・平城京跡右京北辺

1　所在地　奈良市西大寺東町一丁目
2　調査期間　二〇〇三年（平15）八月～一二月
3　発掘機関　(財)元興寺文化財研究所
4　調査担当者　岡本広義・佐藤亜聖
5　遺跡の種類　都城跡
6　遺跡の年代　古墳時代前期、奈良時代前期～鎌倉時代後期
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平城京跡右京一条二・三坊、北辺二坊にあり、西隆寺旧境内、及び「喪儀寮」推定地にあたる。平城京北辺地域には、明治時代からその存在も含めて議論の尽きない北辺坊が存在する。今回の調査では条坊遺構、掘立柱建物群、井戸、流路などを検出した。

奈良時代前期から中期（西隆寺創建以前）には一条北大路、西二坊大路が設置され、一条三坊側は坪内道

（奈　良）

路により坪内を二つ以上に分割して利用していたと考えられる。奈良時代後期から平安時代初頭（西隆寺創建以降）には坪内を分割する道路が消滅し、新たに規模の大きな建物を複数建設する。また、北辺坊側には柵列などが見られるが、道路側溝が存在しないことをトレンチ調査で確認している。九世紀後半から一〇世紀初頭には西二坊大路西側溝が埋没し、西隆寺の瓦を投棄した瓦溜りが見られる。

中世の遺構は、一条北大路を中心として道路沿いに展開する。これらの遺構群は、一三世紀後半を最後として継続しない。

木簡は奈良時代後半の井戸SE二〇一六より出土した。他に複数の遺構から、「寺」「下」「石川□□」などと記した墨書土器が出土した。

8　木簡の釈文・内容

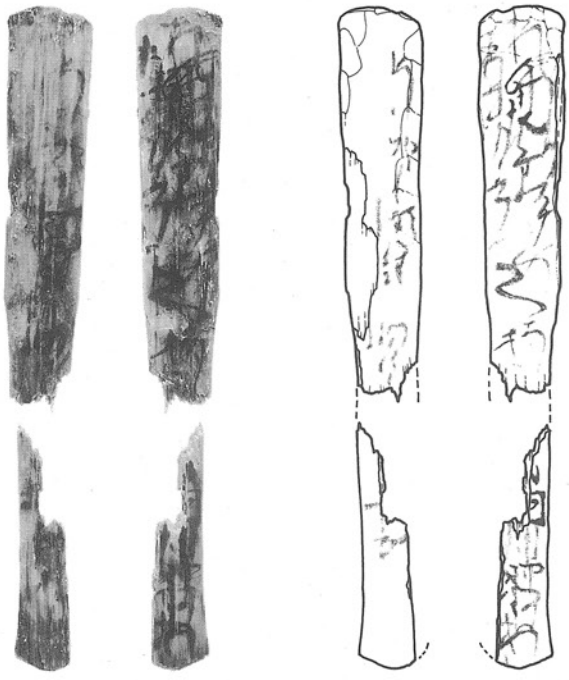
(1)　・□□□□〔郷カ〕□…□□□□□□」

　　・「□□　□□
　　　□□　…　□□
　　　□□　□□　」　　(125+76)×25×4　065

木簡は井戸枠内中層より出土した。二片に分離しており直接接合しないが、同一木簡の断片であると考えられる。下端部分に両側から浅い抉りを施し、撥状の形状を呈する。上端はヘラ状に丸く削り出す。上端の削りは二次的なもので、木簡としての用途を失った後、何らかの木製品に再加工されたものと考えられる。文字は重複が多く判読が非常に困難である。僅かに「郷」かと思われる文字が存在することなどから、あるいは荷札木簡などの可能性も考えられる。

なお、釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏、馬場基氏、山本崇氏のご協力を得た。

（佐藤亜聖）



赤外線デジタル写真